

# 「暮らしの中で逝く」こととは

超高齢社会の中、医療や介護が必要な人を自宅のような環境で最後まで支える「ホームホスピス」の関係者が集まったホームホスピス全国合同研修会（全国ホームホスピス協会主催）が11月30日から2日間、広島市の広島国際会議場で開かれた。九州など34道府県と米国、台湾から福祉、医療関係者が参加。12月1日には市民公開講演会も開催。年齢や障害の有無にかかわらず、誰もが命の時間をどう大切に使いたいのかを考えた。

## ホームホスピス全国合同研修会



ホームホスピス全国合同研修会が開かれた市民公開講演会

### 地域全体でケア

研修会では、米国・ハワイの看護師で、日系人を受け入れるホームホスピスを運営する三浦佳代子さんが基調講演。ケアした30代の日系女性「は、子宮頸がん末期で、結婚式直前に亡くなった。日本から駆けつけた父親がウエディングドレス姿で眠るまな娘の顔を優しく見て続けた姿から、深い悲しみが伝わってきた」と語り、

「たという。また、がんになった女兒(8)は、小児ホスピスのリビングで、母親の腕に抱かれ、家族や近所の人々に囲まれて息を引き取った。最期まで意識があり「苦しい?」「いとど、死は苦しいことでも怖いことでもない」と周りの大人に教えてくれた。三浦さんは「ホスピスに関わる人は心を開いて患者や家族の思いを受け入れ、しっかりと隣

に立つことです」と語った。続いて、広島県尾道市医師会地域医療システム研究所の片山寿所長▽小規模多機能型居宅介護事業所「朝の浦さくらホーム」(同県福山市)の羽田富美江代表▽市原美穂・全国ホームホスピス協会理事長が参加し、「暮らしの中で逝くこと」をテーマにしたシンポジウムが開かれた。



市民公開講演会で活動について話す市原美穂・全国ホームホスピス協会理事長=1日、広島市の広島国際会議場

尾道市では、開業医が主治医機能を持ち、急性期病院と連携。片山所長は看護師など在宅生活を支える専門家と共に、退院して自宅で暮らせるためのカンファレンスを行い、在宅緩和ケアなどにつなげていることを解説した。

## 住み慣れた地域で 暮らしぶりを守り 「助けて」言える関係築く

**ワード** **BOX** ホームホスピス 病気の治療が終わったのに介護力に不安があって帰宅できない人など5、6人の利用者が民家で暮らし、訪問看護、訪問介護とかがかりつけ医に支えられ、最期まで安心して過ごせる仕組み。宮崎市のNPO法人が始めた取り組みが全国に拡大。ケアの質を高めるために全国ホームホスピス協会が設立され、定期的に研修会を開いている。

市民公開講演会には、宮崎大医学部大学院の板井孝吉郎

意思を尊重してさくらホームでの生活を継続。その後、男性は自宅の寺に向いて家族と花見を楽しんだ6日後、天寿をまっとうした。羽田代表は住み慣れた地域で暮らし、老いる人を支えるために、その人の暮らしぶりを守ることが大切」と強調した。

教授と、長尾クリニック(兵庫県尾崎市)の長尾和宏院長が登壇して講演、会場の質問を受けた。

会場からは「長生きする人が増える中、家族が介護で支えきれない例もある」「『借りをつくりたくないから他人に頼らない』という高齢者がいる」といった意見が出された。板井教授は「『孤独死でも構わない』と言つ人もいるだろうが、そうした言葉に無関心になるのではなく、小さなおせっかいを続ける必要がある。それは許容されるのではないか」と発言。市原理事長は「家族だけで頑張るのではなく、他に頼ることも大事。住み慣れた場所で暮らせるように『助けて』と言える関係をつくるのができる地域の力が重要だ」と総括した。

(木下悟)